



裝白菊影集



5  
1860  
2





發句萬題集夏惣目錄

夏之上



花	青	鮮	夏	佛	祭	單	裕	四
葵	嵐	鮓	籠	生	會	物		月
十六丁	十二丁	九丁						初丁
玉卷葛	牡丹	松魚	夏書	灌佛	大矢數	青簾	白重	卯月
					七丁		五丁	
紫羅傘	芍藥	麥秋	夏斷	花御堂	施米	筑廣祭	夏衣	更衣
	亭	十丁		八丁		六丁		二丁
玉卷芭蕉	燕子花	麥	古茶	練供養	千團子	葵祭	夏羽織	綿拔
	十五丁	十二丁						二丁

夏目録





郭公	蓼	藪椿	夏木立	葉柳	新樹	余花	繡毬花	茶挽草	風車	罌粟
鶯入音	新茶	筍	水下閣	夏柳	芍藥	若葉	椴櫚花	芍花	茨花	著莪
老黃鳥	葉撰	落	常磐木落葉	實櫻	藤若葉	若楓	花柚	桐花	白丁花	苣花
閑子鳥	風呂	茄子	竹落葉	茂	葉櫻	青葉	橘	柿花	美人草	豆花

竹醉日	藥日	蓬菅	五月	水馬	納	枝	鶴			
虎雨	幟	粽	夏之中	蚊	蛙	蛙	葭部			
花菖蒲	節胃	笹粽	旱	蚊柱	子子	毛虫	部葦鳥			
石菖蒲	加茂競馬	柏餅	旱	蚊遣	蚤	蝸牛	編蝠			
				蚊帖	蟻					

夏目録



藻花	萍	沢瀉	河骨
花旦見	真菰薊	藻薊舟	蓮若葉
蓮浮葉	蓮	苔花	夏菊
百合	紅藍花	合歡花	紫陽花
推花	粟花	梅檀花	山梔子
南天花	花柘榴	花橘	十藥花
瞿麥	常夏	石竹	懈釣草
酢漿草	萍若葉	蔦若葉	荳草
一ツ葉	覆盆子	桑實	藤實
茶挽草	青梅	檮	若竹
今年竹	竹皮散	瓜花	天瓜花

早松茸	早苗	田植	田植哥
早乙女	流苗	初蟬	蟬
空蟬	蟬時雨	夏蝶	蠅
蠅虎	灯取虫	夏虫	螢
水鳥巢	水鷄	水札	羽拔鳥
練雲雀	鶉川	鶉舟	鶉匠
藻打	鮎	翡翠	鴨子
夏鹿	鹿子	通鴨	照射
火串	干鰓	有無日	入梅
梅雨晴	五月空	五月曇	五月雲
五月閣	五月雨	五月晴	短夜



明易夜 辛子  
夏夜 辛子  
夏月 辛子  
帷子 辛子

六月 辛子  
水無月  
冰室  
冰餅 辛子

祇園會  
嘉定  
不二詣  
土用 辛子

土用干 辛子  
虫干  
夏日  
暑 辛子

日盛 辛子  
炎天  
夕立  
夏雨 辛子

雨乞  
雲峯  
風薰 辛子  
扇 辛子

團扇  
汗  
汗拭  
掛香 辛子

日傘  
簞  
竹婦人  
抱籠 辛子

竹奴  
籠枕  
涼臺 辛子  
座頭納涼

涼  
一夜酒  
打水 辛子  
清水  
晒井 辛子

水飯  
心大 辛子  
葛水  
冷汁  
干飯

梅干  
漆取 辛子  
枇杷  
李  
蓴菜

楊梅  
林橘  
百日紅  
蓴菜  
夏草

凌霄花  
蘭花  
櫻麻 辛子  
夏草  
忍冬

青世  
釣鐘草  
鷺草  
忍冬

風蘭  
紫蘇  
青鬼灯  
萱草

麻  
綿花 辛子  
夏薺  
鼓子花

夕顏 辛子  
青瓢  
瓜  
胡瓜

新麥 辛子  
田草取  
川狩  
小鮒



晚夏	夏川	夏雲	川社	夏神樂	鯖釣
	九寺	夏山	月涼	御祓	沖鱒
	夏海	志だる山	露涼	茅輪	晝寢
	夏水	夏野	夏坐敷	形代	夏瘦
	秋近			九寺	

發句萬題集夏之上

冬至庵庚年 輯  
八雲 東 溟 校合

四月 物の出る本多や四月の梅より  
 白雪のつるや四月のよーけ山  
 朝起きあそぶおまの四月の歌  
 山中居る山乃根造り四月の歌  
 山を眺むるいよふね四月の歌  
 旅人のいひ人おろる四月の歌  
 さく波のあゝえゝ基の四月の歌

生花  
 燈外  
 成美  
 岳格  
 卓池  
 平波  
 踏山















綿抜

くらひうらむあまも掃く玉衣 武衣 袴年  
 わるぬきやけつはさるの嫁のふ 楠芽  
 わる括るあふかるもやどのも多 青蕨  
 綿括やそくそくおの怖る 手代  
 わる括る千もささきまのあふり 梅室  
 綿括やけつる本のはれお生者 丁心  
 くる括るあふ自由なく男の夫 号阿  
 綿ぬきやけつはさる 枕もや 幻芝  
 一と括る綿もあふり 其南  
 こそよ人あふり 例は括る 百助  
 括るあまもひよる括る 吾仲

袴

一りそやうく 袴の那 鬼貫  
 二りそやうく 袴の那 手代  
 門退る袴のひよりふあうの那 一具  
 袴のそくそく 括るの那 沙路  
 括るあふり 括るの那 抱像  
 商人の括るの那 括るの那 手代  
 帯入る括るの那 括るの那 招什  
 ぬき括るの那 括るの那 二五  
 括るの那 括るの那 其派  
 わる括るの那 括るの那 手代  
 出先うの括るの那 括るの那 素柳



をのこ子の足をもくけし後れ  
 日歸りの旅冷つけと後う那  
 程きく別ふふらざる扇くれ  
 窓のあつとちりて足跡の程ふ家  
 後うらくとまき足とくき程う那  
 二十月の入まきこれーとら程  
 きつあぬきけあまき足とる程ふ  
 戸口うらまき勢とる扇の程う那  
 旅人全一日まきとる程う那  
 あつとまきとるの程と物程  
 程とまきとるけけり葉門

貞祇  
 并之  
 禾月  
 槐堂  
 鶴年  
 山翁  
 招軒  
 獨硯  
 井井女  
 佳吟  
 梅室

行末あつとまきとる程う那  
 息やうとまきとる程う那  
 店先とまきとる程う那  
 ちとみあまきとる程う那  
 孝後とまきとる程う那  
 友とまきとる程う那  
 程とまきとる程う那  
 楊子とまきとる程う那  
 柳とまきとる程う那  
 宰領とまきとる程う那  
 子のまきとる程う那

一途  
 欽哉  
 喜路  
 淡吉  
 浮羅  
 護物  
 斗笠  
 永保  
 悠々  
 松弓  
 東儀



白重

祝はる傍うらうらー白重

花雪

白重うらうら皆中よその中人

夢右

白重うらうらくくく教や明ん

潮花

夏衣

暮の暇をすけけけけけけけけ

ノ旦

積ましくあましくうらうらー左衣

慈光

夏羽織

町あしく是て居けけけけ羽織

黄山

あましくあましくうらうらうら羽織

一映

單物

さや並のり粒をさぬ單物

三道人

青簾

五位六位をさぬ青簾

嵐雪

あましくあましく揚々祝はる

百明

うらうらうらうらうらうら青簾

兔七

今うらうらうらうらうらうら青簾

其後

客を誰乳母うらうらうらうら

尚白

あましくあましくうらうらうら

若人

簾うらうらうらうらうらうら

桂哉

茶乃あましくうらうらうらうら

多々女

あましくあましくうらうらうら

水物

極小やうらうらうらうらうら

うらうら

生法辨位うらうらうらうら

碧之

かうらうらうらうらうらうら

立格

家無うらうらうらうらうら

朝頂

あましくあましくうらうらうら

英父丸



屈状もさへんさひやきまこれ 乙に

筑戸祭 古箱といふれく易き祭り 乙也

うさうさかたうさきや箱二ツ 護物

箱あり母り合せくおまけり 小圃

葵祭 群起り葵さあそひ自ひう那 踏

兵休の舞り葵乃祭り 去来

ひくの下のうさうさ葵おさう 標良

祭 高階も舞もさあそひのまぢひ 晚臺

淋さうさ人やおまう 其角

庭まう鬼も舞もさあそひ 古庭

平ふおたあううさうの自ひ 新共

まきく先をさあそひ 永年

若武志や留門と箱 左記

大矢数 梅所のりうさう 菴字

清う打もさあそひ 菴

まきくの舞先をさあそひ 南枝

施米 入りり施米の庭の砂塔 一映

子園子 おともんや 洒

佛生舎 せせはまの庭 乙由

岸のまきもさあそひ 由誓

めれくさあそひ 丁知

おとんさあそひ 召兄







練供養新くきりきり鳥たつ山家うれ  
夏鏡 夏よりきりきりきりきりきりきり  
白雄

作の目まじりきりきりきりきり  
夏書 夏よりきりきりきりきりきり  
一映

似城のなる虫やきりきりきりきり  
其角

夏別 夏よりきりきりきりきりきり  
重厚

古茶 古若きもひりきりきりきり  
文也

鮎

鮎は仁壽や博了鮎の脈  
玄素

鮎梅やたねぬとらき後のふ  
本因

鮎は香の物てあやや梅 梅  
結身

鮎の露もあやきりきりきりきり  
東葉

鮎はれよたねもきりきりきりきり  
乙乙

鮎はれよたねもきりきりきりきり  
鳥老

鮎はれよたねもきりきりきりきり  
百明

松魚

大勢の才よ一本松魚り那  
嵐雪

夏



少きくも海きぬりのり松魚  
 世乃る至種念のなる初松魚  
 板のち終を盗人よも初松魚  
 あげあゆのや流きままへき初松魚  
 初松魚書せし肩そくまけり  
 二人まをなつち終てまつ松魚  
 まのあはれさいつまあれた松魚  
 初らつをともあのをぬま甘のけり  
 終まうちまをそ終也初松魚  
 さつまうと入盡まうし初松魚  
 くもまを後うぬまうや初松魚

風吟  
 大江丸  
 晚臺  
 三浦人  
 由松  
 成候  
 貞祇  
 多由  
 花外  
 可吟  
 喜文

揚子江のり初松魚  
 内川よんせく終まう松魚  
 急なうも男佐佐やま初松魚  
 侍のまけそ通しぬまうのり  
 あけまを男をま外初松魚  
 通うりそひまうつら初松魚  
 みの臺よおまうら初松魚  
 釣まのなれまを初松魚  
 終まうり初松魚  
 松魚賣つまう入まうり  
 喜まうり初松魚

梅窓  
 白起  
 卓地  
 窓白  
 松竹  
 丁窓  
 卓那  
 一幽  
 英父丸  
 百也  
 成年



朝舟の痛し松魚の光つきのれ  
 初松魚素と習し人の暮年  
 雪の冷つく朝や初松魚  
 初づらむ白の淋しむきれけり  
 一馬く口果報なりし初松魚  
 とれむ傷もつぬ誠のこころを  
 麦秋 行脚の麦よりをむやうり  
 家のむね麦や穂をぬく夕の歌  
 麦うみや肉おまがき志望の里  
 夜夜まき子まんまけり麦の秋  
 麦秋やあふんとく一人あ

應 子 松 乃 燕 抱 像 里 喜 女 山 外 丈 学 重 五 浪 化 百 明

煤掃のま度やつくや麦の秋  
 雪のしるの服よあふりや麦の秋  
 雪の世よりつく物や麦の秋  
 子をつれし府人も暮る麦の秋  
 麦秋やま鹿のきれむるの宿  
 さとくまきつこまがく麦のあは  
 宮吉もひらりまかりて麦のあき  
 馬もよみ年ましく人暮るあき  
 小春とまよふ屋あまかり麦の秋  
 舟屋のあふ人まあや麦の秋  
 麦谷ぬく麦秋は年々那

本 薬 尚 白 一 具 萱 宇 波 同 幻 芝 由 楚 望 菜 何 在 山 骨



麦秋やまの嶺より南力石  
 むらあまや 高宮殿りの子泊  
 あはれ此をむくのうも地麦の秋  
 うねるあまの白月や麦の秋  
 麦秋や 風谷のわらふに宿屋し  
 あけ出よしの種とをむき一穂  
 折るる麦穂よや一や作とり  
 秋よりのもう年叫や田麦より  
 背戸の麦のうねる一日あつた  
 ありむさ麦のわらや向ひ國  
 穂よあれハ一息より秋田麦のれ

乙 二  
 樞 下  
 禾 月  
 月 庭  
 荊 口  
 玄 案  
 夷 則  
 古 妻  
 妻 樸  
 荳 窓  
 完 穂

麦

何れ世より山の底みの麦をむけ  
 一帯あられや島相田のまき一麦  
 麦の穂よ衣のさあつる居るれ  
 高きあふや 高神帯のふもくと  
 高きあふし 空をともや苗よりを  
 むらあまのたをた母り高きあふし  
 高きあふし 吹や中流の麦をむけ  
 注連縄よたをたそよくや高きあふし  
 高きあふし 只何とけ一高きあふし  
 同流よたをたあけや高きあふし  
 石川や流をたをたあけや高きあふし

成 美  
 之 是  
 呂 川  
 一 映  
 高 望  
 士 朗  
 是 是  
 真 祇  
 通 甫  
 山 外  
 山 権



牡丹

坂下つゝ紅花をまはしや其あし  
引のや 庭もさし 暮あし  
山田もさし 暮あし  
花の根よりささる泡や 暮あし  
傘の根よりささる 暮あし  
雪もささる 暮あし  
掃るは 暮あし  
我の身の細くささる 暮あし  
幌帽の輪よりささる 暮あし  
古庭よりささる 暮あし

振月 竹 藪 文 子 丁 東 子 鬼 許 嵐  
月 根 唐 遊 轆 知 海 代 貫 六 雪

廣庭よりささる 暮あし  
古の牡丹やささる 暮あし  
踊子の笑はささる 暮あし  
花もささる 暮あし  
切もささる 暮あし  
花もささる 暮あし  
牡丹ありとひとととも山の奥  
海山のけしきもささる 暮あし  
墨もささる 暮あし  
花もささる 暮あし  
今一花越ささる 暮あし

初月 白鳥 交考 子代 大江丸 蒼礼 卓池 高洲 風朗 抱縁 丁心

夏



正面より入り日のまは牡丹うね  
 岡山乃おくり名り牡丹うね  
 うらうらうらうら雨の牡丹うね  
 山風のふくや牡丹の花乃嵩  
 引控く傘さす牡丹が  
 邪を棄てての牡丹傘  
 礼云と掃子をと祝く牡丹うね  
 刺り和つゝきみ牡丹うね  
 小句一とつゝ牡丹うね  
 数きりも又一の牡丹うね  
 二三輪咲く牡丹うね

赤木  
 西月  
 岱充  
 子格  
 文昇  
 亨  
 貞祇  
 完徳  
 濱吉  
 速月  
 新年

花前より葉の茂る牡丹うね  
 みるみる睡香引牡丹うね  
 みるみる牡丹のぬきうね  
 二ひくと纏く牡丹うね  
 新うねと子を流さる牡丹うね  
 一とんゝ秋うねの牡丹うね  
 梅と蝶と牡丹うね  
 甲子の燈心うね牡丹うね  
 日々軒よ花の牡丹うね  
 淋しや牡丹うねの庭  
 牡丹うねや立居ふ習ふ依の女

扇和  
 任年  
 一肖  
 助室  
 流芝  
 荻憲  
 弁之  
 英父丸  
 在尔  
 蘭和  
 眉英



真

高

芍薬

一重なる人驚き牡丹の那  
 隋まきうけ葉もその牡丹が  
 くれそそうけく牡丹のむけ  
 遠くあく大登らう牡丹の  
 鏡のあくを祝く牡丹の  
 隣追うく一いし牡丹の  
 芍薬や路のまけは葉の花  
 芍薬より十葉の茂るの那  
 芍薬や後産まうその井戸  
 五六代芍薬つらう山家の那  
 芍薬や籠と階がくうけ家

梅室  
 梅通  
 護物  
 奇月  
 風也  
 鶴年  
 交考  
 尚白  
 折雅  
 士朗  
 道彦

燕子花

杜若はうや竹うや花の秋  
 のまのちと冬へあはれれそ  
 朝の葉のまきや杜若  
 やまを中とあし叶る杜若  
 ちの鈴瓶のり雨や杜若  
 田舟よりあうそまそ  
 杜若の目を掛くうけけり  
 有るを本らうと山外  
 かきつそそ葉もそそぬむ人  
 浪のそそく庭や燕子花  
 水よりきくひくや燕子花

其角  
 玄素  
 嵐雪  
 文学  
 江月  
 鳥翁  
 山外  
 永年  
 梅通  
 杜若

夏

一











月さそ淋くかぬけのむ  
 赤げ戸のあつとくぬけのむ  
 降中や露影屋の打けのむ  
 嘆かろ一ひとちぬけのむ  
 風鈴やけのむ  
 とろくと嘆くちぬけのむ  
 花あふもかそとけのむ  
 ちる手際ん世よまぬけのむ  
 花あれよ八重かちぬけのむ  
 春けのむ

貞祇  
 多よあ  
 金想  
 氷狐  
 幻芝  
 子格  
 抱儀  
 梅室  
 老白  
 江三  
 皎堂

けのむ  
 初らとあちぬけのむ  
 けのむ  
 けのむ  
 日と夕とまぬけのむ  
 何うもたぬけのむ  
 船舟た女とぬけのむ  
 けのむ  
 々々のむ  
 白けのむ  
 散つるのむ

東之  
 素柳  
 藿唐  
 萃堂  
 心阿  
 名非  
 蘭和  
 清民  
 とよあ  
 若風  
 素樸







美人草

蝶より花をうつと習ひ美人草

一映

荃拔草

くわくよりひらねや荃拔草

両考

卯花

卯のまねやうらね柳の及ぶ

とせ

卯の花の籠りてかん園乃門

吉来

卯のまねやうらねのほめか

汗六

卯のまねやうらねのほめか

其南

卯のまねやうらねのほめか

於風

卯の花上隣歩りやぬれ嵐

之是

卯のまねよいのう思ふるくわう

交考

卯のまねや月のまをるを忘ぬ

聖被

卯のまねや異なきまをるを忘ぬ

貞祇

卯のまねやおてをるはおれ

蒼帆

卯のまねのまねぬ家より

由換

卯のまねやおてをるはおれ

子緒

何照や卯のまねつむ少

素樸

卯のまねや床へおてをるは

丸

卯のまね押おてをるは

二丘

卯のまねのまねよんをるは

伽松

卯のまねや次うらねの深

月槩

卯のまねやうらねのほめか

葉人

卯のまねやうらねのほめか

夷剛

卯のまねやうらねのほめか

川



卯のむや牛のきこる村を  
卯のむや出代さすり男を  
換振王卯のむらりのりお  
卯のむや吹くや修家北  
卯のむやまゝの垣いふ男を  
卯のむやの中うらむる人  
卯のむや二階のちりのき  
麦や——人の卯のむやけり  
卯のむや人うらむるを  
人やうらむるや桐乃を  
犬の子の鳴くまゝの桐のむ

桐花

洗我  
梅令  
一具  
卓池  
士朗  
年美  
外  
乙二  
梅室  
保吉  
洗我

卯のむや牛のきこる村を  
卯のむや出代さすり男を  
換振王卯のむらりのりお  
卯のむや吹くや修家北  
卯のむやまゝの垣いふ男を  
卯のむやの中うらむる人  
卯のむや二階のちりのき  
麦や——人の卯のむやけり  
卯のむや人うらむるを  
人やうらむるや桐乃を  
犬の子の鳴くまゝの桐のむ

桐花

梅井  
素樸  
葱光  
此筋  
稀海  
奇洞  
右老  
南枝  
清丸  
其翠  
三園

桐花

古寺や信なるらむるのむ



花 抽

掃いよのうたひりかかり檜桐花  
 抽のちよき芳志のそん料理のち  
 行家すうあくと抽とあひとを  
 抽のちよや庭へりりる序あり  
 盆と碁もしくんるれ抽うれ  
 今汲し川あけりるれ抽うれ  
 抽のちれの存中白くや緒四  
 葉うくれや葉あつても抽のち  
 い枝を葉いほりるも抽うれ  
 ち抽あよりうへくく庭のちかき  
 垣越しよ抽のち自ふ小白の形は戸

庭江  
 ち世紙  
 言あ  
 彫棠  
 舟休  
 丁心  
 九翁  
 籬庭  
 葵方  
 白堆  
 露山

余 花

抽の中よき枝よりち抽うれ  
 袂のうへき葉もほりるれ抽うれ  
 四五梅の余ちよかききりうれ  
 日と山よ入けり余ちよあきり  
 ちよ葉少く風や葉の刺しり  
 ちよ葉少く風や葉の刺しり  
 夕立よき葉のちのわら葉うれ  
 ちよ葉少く風や葉の刺しり  
 樹の本枝いりりるるも葉うれ  
 舟の碁さすしよあつりも葉うれ

玉枝  
 午心  
 右翁  
 慈光  
 嵐雪  
 其角  
 定良  
 荊口  
 惟然  
 哉人  
 三巴







初句の道くぬききまきまうり  
 かけさゆき其本くのみき葉本  
 古くうきくあつらわき葉うり  
 川つらあつら葉たわき葉うり  
 糸もつらまきまき葉のうら葉  
 入おの葉わきまきまき葉の  
 照るく照るれうらまき葉の  
 八考のりまきまき葉の  
 切掛くちりくくく程のまき葉  
 めつーくまきのまきまき葉  
 一羽りまきまき葉まき葉うり

ちうり  
 糸洞  
 東浜  
 川葉  
 糸以  
 大梅  
 丁世  
 一香  
 糸文  
 五渡  
 田風

美机

信正のまき一香やわり  
 馬まきまきまきまきまき  
 美机まきまきまきまきまき  
 筆まきまきまきまきまき  
 花まきまきまきまきまき  
 風まきまきまきまきまき  
 まきまきまきまきまきまき  
 美机まきまきまきまきまき  
 わりまきまきまきまきまき  
 大用心まきまきまきまき  
 折まきまきまきまきまき

其角  
 卓翁  
 曲翠  
 一魚  
 号夢  
 沙鷗  
 有若  
 南侯  
 抱儀  
 蘭和  
 亭柳



新梅 茶を掛つてくさや喜まの葉より  
密に叶を梅のつるをく新梅の  
るまのま志ぬぬ家の新梅のれ  
あけはや新梅つるをくさく小舟  
危志ぬぬ家の新梅のれ  
新梅のつるをくさくけり餅の叶  
又えくさくさく家たき新梅の  
曼

やうく葉 新梅のつるをくさくけり餅の叶  
又えくさくさく家たき新梅の  
曼

蘇若葉 新梅のつるをくさくけり餅の叶  
又えくさくさく家たき新梅の  
曼

葉 新梅のつるをくさくけり餅の叶  
又えくさくさく家たき新梅の  
曼

桑柳 桑柳の葉かやうや通ひ舟  
蓋とれと枝の飛舟戸や友柳  
脱とあやふ名お重一友柳  
花と叶一風くさくさく梅の葉  
実さくさくの大和何角とけりしれ

夏柳 桑柳の葉かやうや通ひ舟  
蓋とれと枝の飛舟戸や友柳  
脱とあやふ名お重一友柳  
花と叶一風くさくさく梅の葉  
実さくさくの大和何角とけりしれ

冥梅 桑柳の葉かやうや通ひ舟  
蓋とれと枝の飛舟戸や友柳  
脱とあやふ名お重一友柳  
花と叶一風くさくさく梅の葉  
実さくさくの大和何角とけりしれ

梅室 孔葉 若山 若地 文子 寸長 獨確 茶也 新年 慈光 鬼貫  
希因 史邨 芥之 里妻女 籬唐 一函 一映 一胤 涼帝 知長 白鳥



辰

月の底のつらまをわく橋の突  
わひさきと推すくそり橋の突  
居るくくゆふあや橋の突  
おとあひれ坂のきりや橋の突  
夕景や居るくく川のきり  
傘のきりくゆふあや橋の突  
推すの面よりそあはる辰  
舟はせえきく人のあはる辰  
さくけく礼をさくく辰  
宮さくあや橋の突  
あや橋の突

橋 哉  
夷 則  
丁 出  
一 魚  
丈 孝  
士 芳  
子 格  
江 三  
鶴 智  
板 室  
九 菊

夏本立

よいものなれくゆふあや橋の突  
ちれの耐折りくゆふあや橋の突  
ねねくゆふあや橋の突  
望ぬのくゆふあや橋の突  
舟場さくあや橋の突  
まのくゆふあや橋の突  
地の果たあや橋の突  
望ぬのくゆふあや橋の突  
舟はせえきく人のあはる辰  
さくけく礼をさくく辰  
宮さくあや橋の突  
あや橋の突

若 光  
素 樸  
素 伯  
江 月  
雨 堂  
ち 也 紙  
鬼 貫  
希 因  
景 文  
千 崖  
乙 二







ちよや筆作のたるとり  
井の子や赤や世教を説く  
井の子は能く處のあふ月夜に  
井の子や親子好むく世の外  
井の子は能く其りともく待きそり  
井の子を榮えせむるおぼしき  
井の子や成ても節一ののり  
子よせうといへる世にふき親り  
子外やふきの葉のりの夢とち  
何れもいふくや落の海にきぬ

梅令  
途流  
榮子  
船村  
右旅  
南枝  
山外  
東溪  
乙女  
波村  
曲家

落

茄子

いれしを鬼灯あまの茄子  
糖の身よけしき茄子の那  
昔あまのききあれくや茄子汁  
赤色はよあれけりきくや茄子  
公説のめもあぬさくや初茄子  
赤朱の上よき他は茄子いれ  
手紙よきあ打しけりまの茄子  
隣へもいせく度や初茄子  
はありてあまのきく一初茄子  
小灯を掲あく家や落の處  
あまのきく落のきよ落乃雨

原菘  
為有  
北枝  
梅室  
洗我  
素樸  
礪山  
送表  
右節

落



新茶 園女  
七

新茶 園女も花さぬ源平の新茶は

風よ春のついでに吹き新茶の

味もくせ新茶は新茶は

枯の戸もくせ新茶は

大鼓をくせ新茶は

風よ春のついでに吹き新茶の

味もくせ新茶は

枯の戸もくせ新茶は

大鼓をくせ新茶は

風よ春のついでに吹き新茶の

味もくせ新茶は

枯の戸もくせ新茶は

大鼓をくせ新茶は

風よ春のついでに吹き新茶の

味もくせ新茶は

枯の戸もくせ新茶は

大鼓をくせ新茶は

風よ春のついでに吹き新茶の

味もくせ新茶は

枯の戸もくせ新茶は

大鼓をくせ新茶は

風よ春のついでに吹き新茶の

夏

七

支考

園女

一映

嵐島

史邦

宗因

重房

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角







井の舟をまきし布のくしし時を  
布をまきしくし月をまきし  
布をまきしまきし世をまきし  
道りや只一まきの布をまきし  
布をまきしくし布をまきしけり  
布をまきしまきし今まきし部公  
月のまきしまきし布をまきし  
くし布をまきしまきし部公  
くしくしくしくしくし布をまきし  
布をまきし布をまきしをまきし

由 藤  
途 伝  
山 馬  
仁 里  
吉 修  
蒼 帆  
有 人  
標 堂  
成 美  
完 東  
葛 三

布をまきし川の舟をまきし  
くし雨をまきしけり布をまきし  
くし布をまきし布をまきし  
島の灯の照らす宵や布をまきし  
布をまきし一村あやほまきし  
又まきし布の照らす布をまきし  
今のみいまをまきしけり部公  
くし布をまきし布をまきし  
布をまきしまきし布をまきし  
湯やりのくしれまきし部公  
大海へまきしにまきし布をまきし

可 郡 里  
乙 二  
月 居  
蝶 菜  
佳 年  
我 老  
羽 人  
素 折  
也 雅  
鳳 毛  
右 高











谷越しや平吹風の因子鳥  
冷しぬ春のありや采子鳥  
草花くさき成りし采子鳥  
閑子鳥の春よ極る山路に  
淋しきの風よ秋もや閑子鳥  
采子鳥のやまのふはあり  
けしきへ出つるや采子鳥  
あしと垣根へあたり采子鳥  
あしけりし日よあつた采子鳥  
日は花い共品中や采子鳥  
朝起をまらさるや采子鳥

乙州 其角 正秀 鬼貫 越路 蝶夢 是夫 大梅 住年 叢 万葉

そよそよ細川やうんこ鳥  
宮古能菊往けりかんこ鳥  
采子鳥のやまの極のふはあり  
春のゆきあつた日よ采子鳥  
あつた日よあつた日よ采子鳥  
采子鳥のやまの極のふはあり  
日は照るとさのふはあり采子鳥  
あつた日よあつた日よ采子鳥  
日はあつた日よあつた日よ采子鳥  
あつた日よあつた日よ采子鳥  
あつた日よあつた日よ采子鳥

影左 遙流 水狐 子格 素樸 稻洲 於月 真山 鳥谷 平波 雜座



鶴

葭 割

夕ぐれにけしむ水の中や童子鳥  
 菅の両脇の鳥つんたアうれ  
 負い子の残りさきまをや鶴の音  
 うい切や草薙笛を吹かふらん  
 うい切や口と体めし飛たけり  
 うい切や投出さけり馬の背  
 うい切や二目とまききし捨乃其  
 うい切のまをを替ぬ是より年  
 うい切のけまかたけりけり二日月  
 割葦鳥けし子鳴や橋の音了乃能  
 物の名も替れは葭よりけり子

梅室  
 三得人  
 一映  
 保吉  
 香麻  
 永年  
 子格  
 美非  
 麓彦  
 露川  
 童平

鰻 鰻

耳せれくくやえまけりぬりけり子  
 けしきとも音坂くくやけりけり子  
 返出せり一羽かりけり行り子  
 日のくくぬえまかたけりけり子  
 池まきや芦四五本よりけり子  
 傘を巻きてきくやけりけり子  
 冬たつて来くくくぬえまけり子  
 管あけくくまきやけりけり子  
 世まきけりけりきくまけりけり子  
 田の邪うまきけりけりけり子  
 水まきけりけりけりけりけり子

若白  
 若夫  
 梅室  
 双鳥  
 素樸  
 大費  
 素行  
 若之  
 無氣  
 風朗  
 其角











水馬

クニ立のありとを推しぬる馬

青谷

蛭

橋下をうり送まわらざる

枝玉

蚰蜒

草衣の怪の血をけり怪の口

有明

蟻

存者も喰入り怪をくけり

南皮

何れをくくあつるあやう蚰蜒

慈光

這へりけりまきうまぬ蚰蜒

たんげん

這出せりうのあつる下の蟻の考

出翠

押りあつたあつるあつる蟻

善本

飛鳥くまをくまの鳥や蟻

てんげん

わら家々蟻のあつる地をけり

猿籠

故のつづきあつる空のうりあ

蚊柱

山道の蚊を屋中へ入るけり

志来

一節あつる屋中や蚊の居る

多々

屋の蚊や柱の下にけり

梅室

屋の蚊や柱の下にけり

小柯

けり蚊をつくやまを蚊柱をけり

招什

蚊のあつるあつる蚊柱をけり

平波

通る蚊のあつるあつる蚊柱をけり

善本

つる蚊のあつるあつる蚊柱をけり

是非

蚊のあつるあつる蚊柱をけり

玉圃

蚊柱のあつるあつる蚊柱をけり

其角

蚊柱のあつるあつる蚊柱をけり

鳥谷



致巻

致極やぬけぬえん元のみ  
 松舟のくまのけき草の致き  
 致き玉や斧の女の石を  
 加やうや懶物くう一若一人  
 致より致致きりの多きを  
 月致致只まの致致きり  
 居まれば又風替る致きり  
 致き禁池吉や吉の致きり  
 せやけのりまきり致きり  
 川風のきりまきり致きり  
 掃先の地のさくや致きり

淇石  
 古来  
 嵐雪  
 其角  
 抱倚  
 梅室  
 多安  
 永保  
 函派  
 白起  
 風調

致帖

伐おらば原本をきり致きり  
 致きりくそそろろ原を  
 居洲深くきりく好む致きり  
 三月月の入もも結ぬ致きり  
 吉伝く娘の戸口の致きり  
 つつらみ慰む木との致きり  
 本使りり致きりいあや原の奥  
 け先このん入けり懶のう  
 手枕や月を布目の懶のう  
 袖を免く懶西のき月取れ  
 涼しさの外くうんえて懶の

籠原  
 在尔  
 島津  
 大費  
 船村  
 蒼帆  
 卓文  
 文孝  
 智月  
 言有  
 永年



以燈とれも入敷故帳の  
 附出さるる一軒の  
 出さるる物く故帳が  
 孫立や子ら掃の  
 屋の改修する  
 まとも客ともつら  
 の帳とて居越る  
 是えとせぬる

濱吉  
 鶴駕  
 一有  
 一具  
 梅令  
 手格  
 欽哉  
 梅室

發句萬題集夏之中

冬至庵庚年

八雲東溟

輯校合

五月 初より身を虱は責る五月の

江兆

麦わりの上ふむ里の五月の

渭川

夕雨のおさへつけたる五月の

士羽

け先子親の控をあれ五月の

三津人

あそむるの客の五月の

外六

柏きく日暮雨自五月かま

本年

一月 目より時や時更年月の

たけ



葛蒲

雨を山極人續く年月くれ  
 かと起るけりや五尺のあやめ草  
 志より尾のそ家くろあやめれ  
 新く城もあやめ免あまうの志  
 屋根ふたとなんく昔るあやめ  
 昔てあま門く志のあやめ  
 あやめけ目念のあこのあやめ  
 をかーやれ岸の中よりあやめ  
 屋中を過る田あやめあやめ  
 幾度と蝶ひくくや軒あやめ  
 向ひのと又念せくあやめあやめ

慈光  
 志  
 鬼貫  
 其角  
 梅室  
 乙二  
 茂美  
 南枝  
 岱元  
 秋哉

葛蒲酒

かきぬくあやめけり枝乃際  
 あまの初のあやめあやめ  
 昔あやめあやめあやめ  
 かくわろ池のあやめ  
 くるあまをんくあやめ  
 昔とくく隣あやめ  
 於湯の似城甲あやめ  
 村中り屋の湯あやめ  
 一つく温る壺の中あやめ  
 昔蒲刀 君く代のあやめ  
 あまへあまのあやめ

慈光  
 新  
 若  
 子  
 碓  
 白  
 言  
 汗  
 完  
 見  
 貞



葛蒲打 倣とくしつしとせぬやあや打  
印地打 子と似る子討つともや印地打

年よき人の叫や印地打  
おりの人よあれ印地乃て石

菴 源通るよりせぬと菴を菴とけり  
粽 粽修ふ片もよきむ 粽 粽

ぬも竹一口よまかり 粽五把  
よきやうと粽とくけり 鹿中

山草の後の目をけり ねちきに菴  
巻きくつてつてのちきねのちあれ  
扱てよね扱子とんやちききい

ちきりと粽ゆあのみおをけり  
とく前よつみやうんを粽に

水波のちきねのちきねに  
粽とくまよつてきき草のちあ

ちきねゆあまきりてんを屋に  
今ねりよねとけりぬちきね

湯舟のちきねを菴とて  
梓さくしつや小舟のちきね五把

世にけりよあまきりてんを粽  
雨りりよ金合をけり 菴ちきね

扱ゆとくしつとあまきりてんを粽

一 映

仙 化

溪 石

嵐 雪

蒼 帆

ちきね

嵐 雪

路 通

加 へ

松 下

二 晶

濱 吉

小 柯

山 菊

朱 英

梅 室

尾 橋

若 之

龜 歌

松 海

朱 菱

乙 二



柏餅

仕翁まろやうまはん危柏餅  
まろく〜と其桑の生柏餅も

薬日

祈きのけー祭別そ葦津  
おあやめ懺とあぢしし

松風とまげ〜うき世の懺れ  
子孫若の分別にゆる懺り那

あお時々冷え〜ゆる懺り那  
雨や終〜うまろくの〜おあ〜

遠けきそ〜静きんゆる懺り  
男とけ〜う〜居〜子や〜懺

まろ〜まろ〜まろ〜まろ〜懺  
二階〜う〜う〜う〜う〜懺

慈の出入り〜う〜う〜う〜懺  
常世か〜古〜ま〜ま〜懺

草の戸〜う〜う〜う〜懺  
競馬〜う〜う〜う〜懺

人の世〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜う〜懺

わらわ〜う〜う〜う〜懺  
あ〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

〜う〜う〜う〜懺  
〜う〜う〜う〜懺

休疎日

抱琴

南枝

一映

其角

交考

蝶巢

右底

我亮

倍々

六輝

外六

風朗

山外

暮古

濤水

其角

山川

暮古

梅室

多古

士朗

まや



白きや川子碑日の人あめ  
 水柱や盛りのせり茶や八海  
 水柱やいそぎ新葉よりせん  
 干物の若もせんけ柱  
 水柱を暮あらしと今秋を危  
 水柱を粒母け也あとの葉  
 水柱根をゆきくとやまけり  
 柱を柱にけりけりぬりぬり  
 水柱を日をやてて柱をけり  
 水柱を打ちあきせりけりけり

其角 聖坡 以之 西湖 多よめ 南枝 史子 菅窓 永光 亭子 古老

虎雨

今柱を竹のうらまきあふ一葉  
 虎の袖そとあやら降る候  
 降りの中より名や虎雨  
 淋しきや虎雨に雨に  
 八音漸や泣さめりまの虎雨  
 花菖蒲 おあやめ五尺の露とあけられ  
 四池を候あきけりおあやめ  
 石菖蒲 石菖をよれ草よりそよ鐘  
 藻花 藻の毛もついでけり網の魚  
 道辺乃が藻をれきく雪の雨

葛古 東溪 鬼貫 一考 土芳 其角 曉壺 一映 三侍人 謹物 是村







驚中あつるの夢や若菜州  
 夢の初く若菜集の舟  
 藤舟 藤舟 葉の葉をくくんゆ  
 蓮葉 押水のあけくく蓮のわく葉うぬ  
 浮蓮 葉をくくんゆ  
 蓮

さむくくく蓮うくくいけの露  
 蓮のむ面白くくくくくかたり  
 晩の露をくくくくくくく  
 包れくく水の伸くくく蓮うぬ  
 蓮のむくくくくくくくく  
 新他くくくくくくくく

葉のむ面白くくくくくかたり  
 晩の露をくくくくくくく  
 包れくく水の伸くくく蓮うぬ  
 蓮のむくくくくくくくく  
 新他くくくくくくくく  
 葉のむ面白くくくくくかたり  
 晩の露をくくくくくくく  
 包れくく水の伸くくく蓮うぬ  
 蓮のむくくくくくくくく  
 新他くくくくくくくく

也有 籍屋 終水 文遊 是矣 鬼貫 支考 乙妙 聖波 通南 鮫堂  
 抱係 來美 乙二 助宣 蒼帆 丁知 子緒 橋室 東保 百明 士朗







合欵花

たすおとぬ妻のくさしやおのこ  
 紅つむや 赤くす 旭のれきうち  
 手と唐ふやれくさしや紅のこ  
 舟曳の妻はあまうけふりこ  
 象河や 雨と西施、合欵のこ  
 合欵の本はゆきやぬきむ清らけ  
 明くあまきとや月まむ合欵の枝  
 明易き秋のうつらきやけあま  
 夕日うらんあまうけりぬ合欵の花  
 火を焚く庭うら門やけあま  
 雷のまけくやけあまうけあま

山 店  
 丈 左  
 涼 苑  
 子 那  
 ち 世 派  
 仙 花  
 招 什  
 風 石  
 伯 遠  
 梅 令  
 素 行

上毛

合欵

日向七川合欵を付井とさうり危  
 かしおとや終日雨の合欵こ  
 けさのけきくあやうらぬあのか  
 合陽をこや義を七危の別府あ  
 合陽をこや白もあけくああま  
 合陽をこよ山からつるけりう危  
 合陽をこや合羽干したる早泊り  
 合陽をこの妻をいづく浅黄舞  
 合陽をこや舟と西施あ元を不  
 合陽をこや仕舞のつあ屋う病  
 合陽をこよきうけあまうけあ

枝 玉  
 号 阿  
 一 首  
 ち 世 派  
 希 因  
 山 外  
 塞 馬  
 由 摺  
 蒼 帆  
 乙 乙  
 乙 丙







花 柘榴 志つてくさくさのまやむ柘榴  
花 橋 臨河津やまね橋も茶の白ひ

唐厚  
さくせ

白くさくさのまやむ橋の都くもそ  
たちとめやまの極くさくさ

鬼貫  
木因

橋のつかひあはれ少あひの那  
橋や月夜とがれは浮世えく

高岡  
浙江

十葉を  
瞿 麦 推子や 藤 絵 女 人 を う ら ん

風朗  
越人

推子よ 少年とて 干きや 川より  
推子のまらぬき節のまらぬかぬ

荒菜  
糍 椎

推子のまらぬかぬ まらぬまらぬま  
推子よ 那のまらぬまらぬま

為白  
色 欠

推子のまらぬまらぬまらぬま  
推子や やまのまらぬまらぬま

兼 兼  
双 鳥

常 夏 半石のまらぬまらぬまらぬま  
推子や 袖 霞の行 橋のまらぬま

一 映  
双 鳥

推子や 袖 霞のまらぬまらぬま  
推子や 袖 霞のまらぬまらぬま

兼 兼  
成 美

石 井 石 井 や ま れ の まらぬまらぬま  
推子や 月 代 の 推 釣 羊 の まらぬま

兼 兼  
兼 和

推子や 月 代 の 推 釣 羊 の まらぬま  
推子や 月 代 の 推 釣 羊 の まらぬま

兼 兼  
兼 和







美井や各の中そのそり合  
 美井の序ききや七ッ鶴  
 美井や根子跡しつる跡乃紅  
 美井や朝ふき近き梳乃和と  
 美井のたをみしけや屋乃種  
 美井や壁ぬり整へ服乃家  
 若竹をわけりて風の葉月乃那  
 今年竹 雪まのよとの降まよ今年竹  
 朝風をわけりて朝ま今年竹  
 松苗の中や風乃川今年竹  
 杜中や一遠ありて今年竹  
 ちこれ合てを清ぬ今年竹  
 親井よ一服さし今年竹  
 権櫻の中や生ぬく今年竹  
 石垣やとをさし今年竹  
 壁まわつ境りの中や今年竹  
 風中よまを吹きや今年竹  
 竹皮散 結搦を天幕よちりぬ井乃波  
 瓜 花 落るるる露のありけを瓜の世  
 二りまを瓜にけりけり瓜乃世  
 蔓先のありけりけり瓜乃世

和泉  
 東素  
 繡鶴  
 由誓  
 心阿  
 在尔  
 文鯉  
 二之  
 梅室  
 庭月  
 松竹  
 得燕  
 茶山  
 柔和  
 采兵  
 素樸  
 子松  
 子代  
 一映  
 漢物  
 素柳  
 寄潤



むらむのありともんく瓜もけ

天瓜花 けき瓜より 志まや けきむの鼓

早松茸 けきまのいさめや 早松のけ

早苗 西より東より川子苗より 風の音

けねのまのまや 早苗より

子と鯉親とてれく 早苗舟

苗のまを子橋より 晩稲より

月細く 跡より 柳田や 苗のま

山の日を 襟より けく 早苗の

草中へ 流きく けり 苗一把

風より けり けり 苗より 草かき

水より けり けり 早苗の

あけん けり けり けり 早苗の

植くよき 早苗のまや 川にひ

田一板 植くよき けり 柳の

橋より けり 念佛より 田植うね

鎌倉のまを けり けり 田植の

植くよき けり けり 田一板

隣田へ けり けり 田植の

朝霧よ 茶のまを けり 田植の

起るれく けり けり 田植の

春月の夜を けり けり 田植の

黄山

三峽

如流

其角

利牛

落梧

一具

梅室

梅通

草也

標山

抱像

山外

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角



系のやう相の田植のゆき中  
 ありよ鳥人合せく田植のれ  
 とりをててむ嫁なり田植の  
 貝吹らそしきる里は田植の  
 植る田も又くぬよあや濁るあ  
 つまきく大名様む田植の那  
 河のさか田を男はく植るけの  
 山あよ後ひ合せく田植のれ  
 定ぬく居れかこしきく一植る  
 手まさしくよ別きく植る植るか  
 植る田よさくのけき戦きるれ

卯七  
 乙由  
 有人  
 白海  
 黄山  
 桃号  
 西月  
 今是  
 波同  
 堅菓  
 史子

早稲のりりる田植の手はのれ  
 植る田井の家や軒のとも  
 植るのりや山田のあまうりる  
 乙号の這の意あり田植るさ  
 手元より風のそしきる田植のれ  
 手はのりきくぬよかた田植る  
 植つめく田よひさけり丘の家  
 阿波のり降るみくく田植る  
 植る田やあれくよとと思さく  
 届は田植るくあやわまらる  
 家屋の敷ぬけてあや田植のれ

芹舎  
 茶軒  
 乙良  
 藤母  
 尾橋  
 朵峰  
 棠和  
 梅室  
 沙路  
 奈池  
 丁七



梅くさく山田と鹿の通をけり

士朗

侍舟のききき田植のれ

葛三

田植分

風流のききき田植のれ

とせ

山のけや人目おき田植のれ

若左

まはるや世帯たき田植のれ

正彦

おのききき田植のれ

由誓

早乙女

早乙女おきき田植のれ

卷雪

おのききき田植のれ

百里

早乙女や若きき田植のれ

右藏

早乙女の馬叱りき田植のれ

和戒

早乙女の袖あきき田植のれ

南枝

おのききき田植のれ

二丘

早乙女おきき田植のれ

若丸

田植おきき田植のれ

大江丸

流苗

何まきき田植のれ

籬彦

わききき田植のれ

榮和

初陣

初まきき田植のれ

寛松

おのきき田植のれ

五郎

梅

梅まきき田植のれ

とせ

おのきき田植のれ

鉤忍

おのきき田植のれ

宗因

おのきき田植のれ

嵐堂



啞蟬のたゞぬ指もあそんか  
 月代も夢んく船をせいの評  
 魚坂やいづくに居る蟬のこゑ  
 風のそよよと竹のたけつ  
 日清のたけつ 暮るやあつたせ  
 都を去る腕のまをうや蟬のそ  
 蟬のそよよと山より雨  
 本常のたけつ 暮るやあつたせ  
 里をうたむや河をよ蟬のこゑ  
 竹藪やあつたあれハ蟬のそ  
 蟬のそよよと雨の上

杉 風  
 正 者  
 初 月  
 氷 狐  
 抱 儀  
 古 砥  
 禾 木  
 景 文  
 杜 有  
 碧 之  
 席 尺

空 蟬

蟬のそよよと川つらえ  
 世の事や若いのなのつらえ  
 日各面うせよと指はたけつ  
 けく井へ来て啼けり蟬のそ  
 蟬のそよよと一産のそ  
 せよとつらえとつらえ  
 あそんくゆふのそよよと蟬のそ  
 空をせよと石のそよよと蟬のそ  
 蟬のそよよと働くやうとあそん也  
 蟬のそよよと空をせよと蟬のそ  
 空のそよよと空をせよと蟬のそ

一 仙  
 新 年  
 竹 外  
 風 也  
 多 女  
 馳 岳  
 子 松  
 一 井  
 旬 空  
 禾 木  
 丁 也



夏蝶

夏蝶あまのりや軒のむやう

茵和

うね人の旅まがしへ本音乃蝶

たむげ

かぶらつて飯粒焼くあまのり

鼠堂

焼くいづる眼まがしへ本音乃蝶

子堂

浦風やむつて蝶のまがしへ

岱和

蝶の居るおきらへ本音乃蝶

素行

待たるるまがしへ本音乃蝶叩

抱琴

飛時を蝶とり焼くまがしへ

素右

雨よりや蝶まがしへ蝶のまがしへ

小圃

雷のまがしへ中へ本音乃蝶

文學

夕まがしへまがしへ本音乃蝶

正秀

まがしへまがしへ本音乃蝶

通甫

蝶まがしへ本音乃蝶

禾月

蝶まがしへ本音乃蝶

寸風

蝶まがしへ本音乃蝶

梅室

蝶まがしへ本音乃蝶

禾本

蝶まがしへ本音乃蝶

素屋

蝶まがしへ本音乃蝶

沙路

蝶まがしへ本音乃蝶

年丈

蝶まがしへ本音乃蝶

たむげ

蝶まがしへ本音乃蝶

志来



真  
五

義なりて物こころよきかな  
まりの心ありてそのけりや花のあり  
草と木も草くさや水のあり  
斗部屋より屋つらその草のあり  
こころれ一つを扇とあつて身  
水際より水くさる飛ぶる身  
身のひく人ほせくぬま草れ  
田のありて草く草の草れ  
されいこころとふぬあつて  
草のありて風と草れ飛ぶ  
垣越へて園扇と草れ草草

嵐雪  
文章  
西秀  
言水  
多よ  
錦錦  
永保  
北枝  
川文  
友溪  
筆宜

梅先へ草く草れ飛ぶ  
馬のくやうし川や飛ぶる  
おのありて草れ草草  
むつら草く草れ草れ飛ぶ  
強き草れ草れ草れ草れ  
草のありて風く草れ川の上へ  
風く草れ草れ草れ草れ  
新さ草れ草れ草れ草れ  
草のありて草れ草れ草れ  
雨のありて草れ草れ草れ  
草のありて草れ草れ草れ

松故  
旭海  
尼橋  
来美  
未明  
寺修  
仏里  
花外  
流芝  
菊頃  
草布

東  
六



本...  
 雲里  
 礪山  
 梅室  
 鼎左  
 素柳  
 岱雲  
 万儂  
 竹六  
 池山  
 卜枝  
 得書

何波

雲里  
 礪山  
 梅室  
 鼎左  
 素柳  
 岱雲  
 万儂  
 竹六  
 池山  
 卜枝  
 得書

水鳥

飛...  
 車枝  
 赤木  
 其角  
 蕭山  
 菜更  
 藍亭  
 伯孟  
 三浦人  
 得所  
 一飛  
 鳥津

左

車枝  
 赤木  
 其角  
 蕭山  
 菜更  
 藍亭  
 伯孟  
 三浦人  
 得所  
 一飛  
 鳥津



水

波のうねりありて早晩の集  
 水勢はくも人のしや作屋泊  
 時居れは叶くもたき水勢は  
 修く一の竹を水田の水勢の形  
 船舳の消ぬるも行く水勢は  
 ちとのりも雨もたき水勢は  
 行く水勢は叶くもたき水勢は  
 去る水勢は叶くもたき水勢は  
 雨の去るもあやもたき水勢は  
 行く水勢は叶くもたき水勢は  
 門の橋の行くもたき水勢は

谷良  
 水田  
 那水  
 多よあ  
 雪勢  
 蝶菜  
 永保  
 松軒  
 可吟  
 佳年  
 色調

ちきりひくもたき水勢は  
 月夜もたき水勢は  
 庭先もたき水勢は  
 破垣もたき水勢は  
 晴くもたき水勢は  
 里のりもたき水勢は  
 有明の海もたき水勢は  
 向水もたき水勢は  
 白木の流もたき水勢は  
 村口の波もたき水勢は  
 木葉もたき水勢は

舟美  
 南枝  
 烏津  
 換室  
 子裕  
 素樸  
 籠座  
 乙良  
 呂川  
 船村







つゝや 鶺鴒の 鶺鴒といふ

鶺鴒の や 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の つれづれ 一里を 鶺鴒の

舟を 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の

内 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺

目通りを 鶺の 鶺の 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

其 山

鶺

田の 鶺の 鶺の 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

鶺の や 鶺の や 鶺の や 鶺の

内 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺

鶺 鶺



鴨子

鴨の子は生れたるは月夜に

芳之

鹿

鹿の親は鹿の子を産むにけり

一茶

鹿子

灌佛の日に生れ合ふ鹿子の乳

志

矢の如く親の乳をのむ鹿子

立志

破垣やわささ鹿子能通ひ

良

石も鳥のせきく老ゆく鹿子

寸長

畑あやとにけのつぐぬ鹿子

得所

眼くもりの事親に似る鹿子

善

竹の才き里に居る鹿子

乙二

親に似る月夜に鹿子

梅室

馬の子と白い鹿合鹿子の那

亭

松面より付く岩司の鹿子の那

茶靜

形よく経つる鹿子

洗

草の穂のゆれたる鹿子

菜年

袴下をよろしく起る鹿子

蝶二

あはれとてゆく鹿子

鳥

あつさやくきりぬ鹿子

杜

通鴨

餅より食ふ鹿子

杜有

物懼むせぬ鹿子

流

一やうなる鹿子

錦

照射

照射又よ鹿子のまきさきひけり

松風

折角と消つる鹿子

士朗



火串

高古の灯生わらる火串うれ  
松の葉のちささくうらぶ空串うれ  
曉をまよふく入生串の群  
明跡跡生串や風のいわり  
空串を撮這よる空串うれ  
干飯や夕ぐれつらる藤乃家  
有無日 夕暮の日はまおどる居ぬ鳥の群  
入梅 夕暮のかしら入る夕けつら  
双六のおまよひの世はソウラ  
雨のあし 白起を入梅のぬり  
入梅をまよふく入梅へかきせけり  
陰鴨まつくくくくくくく入梅能家  
土所くくと火をうけ梅白の中家うれ  
入梅や 世の葉うけ油むく  
梅百枝や 銀つらぬ門たれ  
梨子梅の葉の居つら梅百枝  
雨とまよふかきくく一教を五月  
五月空 やま木をまよふ五月くわううれ  
五月曇 子山や朝をまよふ五月くま  
五月雪 舞坂や園の五月能めら馬  
網打やこれかまよふ五月やく  
先達のうみ世をまよふ五月雪

龜洞  
雲帆  
深更  
角上女  
菩丸  
惣度  
小聖人  
文學  
胡及  
春草  
清冬

梅雨晴

梅百枝や 銀つらぬ門たれ  
梨子梅の葉の居つら梅百枝  
雨とまよふかきくく一教を五月  
五月空 やま木をまよふ五月くわううれ  
五月曇 子山や朝をまよふ五月くま  
五月雪 舞坂や園の五月能めら馬  
網打やこれかまよふ五月やく  
先達のうみ世をまよふ五月雪

寸長  
梢山  
籠屋  
蓼古  
味金  
素柳  
梅回  
三浦人  
其角  
雪芝  
山店

夏

水



五月雨

五月白くかくれぬ物や津田の橋

五月白くや傘よりけり小人歌

五月白く小粒よりけりぬ五月雨

五月白くや垣根の面を踏むる

五月白くや降るとおあけけり

五月白くや泥むや紀伊の八住司

五月白くやうしとかきけり五月雨

五月白くわけありけり馬の首

五月白くやあまかきけり子の蔓

五月白く止る西根ありぬ

小原女をけりけり五月雨

古世談

其角

尚白

嵐重

鬼頭

吉来

貞祇

月庭

一括

士朗

石碎

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

五月白く雨あがりけり

春文

蓑

佳年

得所

意

梅室

凡兆

四明

梅美

梅通

万額







經秋や梧の結目よりくまの露  
 經秋といふは雀のあきまけん  
 經秋や玉江の芦のつあらし  
 經秋やそれ人百能藝ふ時  
 經秋や築地の古鼓せくろ鐘  
 經秋や少くまゝあらし嵐か  
 經秋はけりくゆるあきくくれ  
 明易秋のうくくや竹の月  
 明易秋と泣見乃病の那  
 病のぬめり焚室の明や露  
 明や露秋のうくく二階の丸  
 明易秋や招鉢のたまりあ  
 病の秋を病ぬる病年の起り危  
 病の秋を土蒸ぬれたるけり  
 病の秋を短きまゝとさし  
 病の秋をまじり秋の旭や那  
 病の秋を海より飛つる鳥けり  
 病の秋やとりかゝるぬ臺所  
 病の月津油より出る赤坂也  
 明てのく家の伏見やな月  
 病の秋や東をがし月を西

菊  
 保青  
 梅室  
 北枝  
 素伯  
 冰七  
 月居  
 凡葦  
 白雄  
 冬招  
 岱老

友 秋  
 友の秋やうつれく明く冷くとの  
 友の秋を病ぬる病年の起り危  
 友の秋を土蒸ぬれたるけり  
 友の秋を短きまゝとさし  
 友の秋をまじり秋の旭や那  
 友の秋を海より飛つる鳥けり  
 友の秋やとりかゝるぬ臺所  
 友の月津油より出る赤坂也  
 明てのく家の伏見やな月  
 友の秋や東をがし月を西

梅室  
 其角  
 成美  
 永年  
 秋美  
 梅室  
 寒松  
 古せ紙  
 嵐雪  
 宗因







帷子能背巾の暑き夕日るれ

洗家

帷子や一坂越せぬゆるむ帯

東溟

过々花

みより子や浴ふりてはくふも

平心

垣越ししちしをさるるはくを

蒼惠

居住居よりさかろるやはくを

控二

為羽織

おたかろるる居るはく為羽織

里若女

晒布

宍輝の布も人へけり晒川

獲物

布さしは布免きの布さし終生者

三峡

發句萬題集夏之下

冬至庵庚年

輯

八雲東溟

校合

六月

六月や岸よきおくあし山

くせ成

六月や舟くたつる酒乃鉢

秀南

六月や舟乃沼下りけり物

万和

六月や夕飯五能ひと風情

寔松

六月や夜飯五能ひとけり

三浦人

六月や待より多き昼乃そら

蒼乳

つけり灯言六月能若屋丸

蒼雀



水無月 六月や好と夕を極乃そら 五渡

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 涼英

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 累更

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 秀外

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 在世

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 真室

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 言在

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 氷狐

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 丁世

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 梅室

水無月 水無月や好と夕を極乃そら 未在

氷餅 年暮とおもふお遠よ氷室寺 外六

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 信島

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 其角

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 沾徳

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 貞祇

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 浪足

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 夢良

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 蛙経

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 是村

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 暁臺

氷餅 氷餅と日乃由さるる旬も氷室は 暁臺



杉風と打込む祇園とや  
 家子とては之れは二つ見  
 嘉定 十六橋宛亮一や  
 富士詣 志く事なり  
 角帽子雪の調むや不二詣  
 明のくをぬくこそらねふ二詣  
 巳く才もさくかきや不二詣  
 下戸連なりまねきふけりふ二詣  
 平福の穂を揺く殿やふ二詣  
 土用 土用のくちを筆を  
 扱不つのた土用の入能人あふ

英父丸  
 大江丸  
 其角  
 素堂  
 沽湖  
 由誓  
 小圃  
 右瑛  
 許六  
 杉風

土用干 うつ宿や揚屋は修つる土用干  
 ありかたは時代はあふや土用干  
 鑑るつるれはあふん土用干  
 るはくのみむ人なりさきや土用干  
 縄つり居ぬ座あや土用干  
 次戸さし女あふあり土用干  
 かり物と見付知し土用干  
 具足是るはかり土用干  
 虫干 うつ考や虫干もさき土用干  
 虫干やせえくもあふ土用干

具  
 其角  
 杉風  
 去来  
 由誓  
 業  
 梅室  
 真祇  
 洗我  
 河く  
 前山











日盛

取獲りて女形多き、暑き身  
 暑くとも。沙木煙らば氣んよ  
 暑き身や字よ出く居る處も  
 日さるゝよたき思白く水、舟  
 日暮るゝや牛ありてく、藪のそ  
 日暮るゝや往來と起るゝ町の中  
 日暮るゝや何おもて往くゝ庭や松  
 炎天 炎さるゝや暑のうへを踏のまふ  
 夕立 夕立はまゝや何まゝ下はるゝん  
 夕立はまゝよかゝらば、雨まゝは  
 夕立はまゝ一人をまゝな女う礼

完来  
 月居  
 平地  
 三津人  
 月庭  
 禰新  
 多よめ  
 東海  
 鬼貫  
 去来  
 其角

夕立や纏ひてくゝわうゝ書  
 夕立や飛ぶく月や松のえ  
 夕立や膝ふくけくゝゝ庭  
 白白や川並ふと起るゝ馬  
 夕立は面あふゝは神輿舟  
 白白は縋るゝ古雨乃波女う那  
 夕立の道りゝゝあゝや舟の飯  
 夕立や刈草いゝゝ電り下  
 夕立や中庭ひつゝゝねねを  
 踏るゝゝ夕立のゝゝゝけり  
 白白や見物尋ね角力部屋

仙化  
 文草  
 嵐雪  
 西秀  
 之道  
 極隣  
 遙月  
 蝶舞  
 左抵  
 遙流  
 二丘



夕立や 出り燈の灯りつ  
 白鳥のけりや 暮らうと暮らうと  
 夕立の月を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 白鳥のけりや 暮らうと暮らうと  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影

手 粘  
 土 塚  
 心 阿  
 素 柳  
 柳 居  
 昌 房  
 利 牛  
 号 村  
 古 朗  
 百 明

夏

雨

夕立や 世の 暮らうと暮らうと  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影  
 夕立の 舟を 浮きぬ 舟の影

成 義  
 梅 室  
 抱 儀  
 糸 新  
 紅 陽  
 小 圃  
 一 映  
 一 礎  
 沙 臨  
 土 塚  
 乙 州







風 薫

涼きく暑候なり風のそ  
 魚雲はす所ゆくやまの峰  
 とは家も人けの人もまの暑  
 かしくは岩家もくやまの暑  
 持ゆしは明く岩格やまの暑  
 病も人も見くやまの暑  
 き浪や風のかりをわひやし  
 風かあるまや鞠場の茶の結仕  
 風かあるま見半ぬ家既うも  
 降さうれをい手扇ふ風うあ  
 子もまもまもく風の薫りけを

卓池 蕙光 玉圃 一宵 具た 乙二 茶靜 東

扇

結合く十二の暑は扇う那  
 扇折るく神き化糖うれ  
 慰く扇くくまもく打坐  
 物くまも時々純た扇うれ  
 初歩りの露よまも扇うれ  
 きくく中扇うけく床柱  
 稚子や扇うけくまも扇うれ  
 一人了扇うけく舟上り  
 夏もまもくえれかちたる扇うれ  
 ちもまもくお易らなる扇うれ  
 泊ちくや川風く掛扇

守武 尚白 於風 大江丸 比蓋 松海 途流 方修 古瓶 岱年 色倒



扇よりあつ風さきき灯之那  
 人のまへさきく扇のし扇森  
 ねのあつさきき扇のれ  
 出女子扇さききさきりけり  
 人の子扇持せり扇りけり  
 扇のさききき扇の隅田川  
 扇のさききき扇のし那  
 吹つけの扇さきき扇の那  
 約羊よさきき扇のし扇のれ  
 扇のさききき扇のし扇のれ  
 あまのさききき扇のし扇のれ

英泉 洗衣 山外 栢室 寸長 氷粉 子格 井括 茶静 其角 宗固

日影のけを押しき成る扇の  
 素秋のさききき扇のし扇のれ  
 いそかきき扇のさきき扇のれ  
 さききき扇のさきき扇のれ  
 新うさききき扇のし扇のれ  
 うもを好人さきき扇のれ  
 買ぬのさききき扇のし扇のれ  
 いそかきき扇のさきき扇のれ  
 栢の風のさきき扇のし扇のれ  
 栢のさききき扇のし扇のれ  
 栢の川さききき扇のし扇のれ

凉菖 許六 松海 佳島 春美 尚古 栢下 丁心 素行 茶静



湯よりや人の堂扇の影う風  
 古里や堂よりぬたふあり  
 子孫強き堂の影の柳壺  
 掃階もさうも掃き入る堂  
 打之くくくかききききき  
 浪高扇もさうとさうさう  
 掃出さうさうさうさう  
 秋の田にさうさうさう  
 家さうさうさうさう  
 玉笹の圃さうさうさう  
 扇の中さうさうさう

流 芝  
 九 起  
 柳 壺  
 二 燦  
 壯 實  
 一 兆  
 我 竟  
 梅 室  
 露 水  
 道 夫  
 岩 雪

掛 香  
 加け香や 唾能娘人とさう  
 汗香や さうさうさう  
 日 傘  
 追つけさうさうさう  
 翌日能うさうさう  
 さうさうさうさう  
 持之さうさうさう  
 窓形さうさうさう  
 さうさうさうさう  
 たうさうさうさう  
 さうさうさうさう

手 那  
 乙 二  
 塞 馬  
 波 同  
 大 阿  
 文 昇  
 其 角  
 百 明  
 梅 通



母が去りお年よのうらぬ草  
そはるんまきくす数也休婦人

休婦人懐く抱やたまくと盆

此君と初より引と世の休婦人

元輝のまゝのまゝ似る休婦人

休婦人月と梅より入よりけり

菊の秋もや白よりかき休婦人

抱 籠 抱籠や梅よりく月と世の

休 奴 人 事 一 と 懶 一 巻 けり 休 奴

籠 枕 籠 まくく系くくくくくくおん

籠まきくけり免くくくくくく

蝶二

卯七

為白

荻古

可都里

朱翠

梅室

慈光

丈左

石彦

五葉

涼 臺 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

涼白

一幽

貞松尼

一帰

他力

諸名

七世

古来

鬼頭

鼠堂

貞室











法水

水打を物打うらぐ際う那  
 打水や程まきまきを流るる  
 打水をよけくさるる流るる  
 打水の流おとれー垣際  
 城あや古井の法水先回す  
 流うらやあまの法水の石草鞋  
 上玉川言解れおま法水うれ  
 松風うらや流るるあま法水うれ  
 我あま人鉄屑まき法水うれ  
 山のけお法水うらまあまうれ  
 角力石の所 手言まき法水うれ

一具  
 永年  
 銀裁  
 林曹  
 古世流  
 嵐雪  
 玄来  
 一草  
 許六  
 行七  
 雨風

法水の玉草つらまきまき  
 身まきまき砂の生り法水うれ  
 是まきをまきまきまき法水  
 流るるや風まきまきまき法水  
 隙まきまきまきまき法水うれ  
 風入まきまきまきまき法水  
 立木のまきまきまき法水うれ  
 法水うれまきまきまき法水  
 法水うらうらまきまき法水の音  
 玉草の二草三草法水うれ  
 法水うれまきまきまき法水の音

飯空  
 速流  
 雲新  
 侍者  
 松竹  
 若兆  
 立木  
 摘山  
 住年  
 園女  
 士朗



甘々の若草の葛葉の下流あり  
 二人しを想ふ人よふる流あり  
 つまへ道のまゝ流る流あり  
 夕べの夕の光り流る流あり  
 清き流ありおの流あり  
 古き流ありまんなけり流あり  
 四五軒とまひ流る山流あり  
 流ありとむくく持て包み流  
 青き流あり流る入流あり  
 夕の光り流る細き流あり  
 橋人のやんし流る流あり

万和  
 暮村  
 羽人  
 杜有  
 南枝  
 壺天  
 稻居  
 旭洲  
 素布  
 素樸  
 永光

明く流のありく流る流あり  
 一に流の細く流る流あり  
 夕の光り流る細き流あり  
 廣く流る流あり  
 流るく白粒けり流る流あり  
 夕の光り流る流あり  
 垣根の流あり川あり流る流あり  
 嵩の流あり流る流あり  
 流るく人あり流る流あり  
 秋の流あり流る流あり  
 流るく流る流あり

素柳  
 碧葉  
 梅室  
 梅画  
 風韻  
 田吟  
 嵐外  
 夕光  
 赤水  
 伯遠  
 江月



















空形や 堰くらきー 糸車  
 空形や 山く 垣のうまら 喉  
 空形や 糸をき 糸の池の端  
 空形や 糸の池のうまら 糸  
 空形や 糸の池のうまら 糸  
 空形や 糸の池のうまら 糸  
 空形や 糸の池のうまら 糸  
 空形や 糸の池のうまら 糸  
 空形や 糸の池のうまら 糸  
 空形や 糸の池のうまら 糸

一具  
 糸車  
 糸  
 糸  
 糸  
 糸  
 糸  
 糸  
 糸  
 糸  
 糸

夕形

夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車  
 夕形 空のまや 油のやう 糸車 糸車

梅室  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車  
 糸車







昨徳利をふるまふやまて沖緒  
 沖緒子にをまつていふはよ  
 沖緒哈くや一人二杯のけ  
 山人の登梯をまきえ草か  
 けく——とよおきゆる登梯の  
 帷子にせんくあを登梯の子  
 子舟のそうけき味をたを梯の  
 ちやまは徳田志のち小食けり  
 ちやまを急きく人々をれち  
 常すくちやまをせかちま切ひん  
 ちやまの我着さくちまを急う  
 几 葦  
 暖 臺  
 娘 山  
 桃 妖  
 寺 依  
 胎 非  
 白 頁  
 其 角  
 風 子  
 去 留  
 葦 古

友村集 徳田子神うつりまてちやま神  
 川なりは路徳田子神  
 徳田子神をれつちやま神徳田川  
 ちやま——ひ目のけちちやま神徳田  
 人まの梯をまきけりちやま神徳田川  
 雷を急く沙法ちやま神徳田  
 ちやま——とよおきゆる登梯の  
 徳田川ちやま神徳田けり人々を  
 川下まをちやま神徳田けり  
 常すくちやまをせかちま切ひん  
 ちやまの我着さくちまを急う  
 几 葦  
 暖 臺  
 娘 山  
 桃 妖  
 寺 依  
 胎 非  
 白 頁  
 其 角  
 風 子  
 去 留  
 葦 古

夏

七



冷そくくや扇くもの口積り乳  
 人の長くと曲りてそくく口積り乳  
 松のけの虫見くくくくく口積り乳  
 川を流す燈のけり 清積り乳  
 茅輪 烏帽子をくくくくく茅輪は  
 子を連て茅の輪を流すくくく  
 めの道くくくくくくく茅輪は  
 白雪や茅の輪を流すくくく人  
 土地の子を我くくくく茅輪は  
 慰のやうくくくく茅輪は  
 名塚の子をわくくく茅輪は

梅室  
 桃島  
 葛三  
 東夏  
 梅室  
 大江丸  
 海所  
 乙二  
 籍産  
 舵岳  
 東海

形代

形代をくくくくく形代は  
 形代のかくつてあるくくく舟の綱  
 川社 舟をくくくく川社  
 月涼 月涼くくくく月涼は上  
 露涼 露涼くくくく露涼は  
 夏生者 夏生者のくくくく夏生者は  
 高くくくく高のくくくく高生者は  
 高のくくくく高のくくくく高生者は  
 高のくくくく高のくくくく高生者は  
 高のくくくく高のくくくく高生者は  
 高のくくくく高のくくくく高生者は  
 高のくくくく高のくくくく高生者は

一葉  
 出流  
 漫く  
 南枝  
 一映  
 思字  
 五浪  
 有墨  
 意先  
 那水  
 文若







晚  
夏  
行  
秋  
山  
路  
中  
招  
集  
路  
コ  
ト  
ク  
エ

護  
物  
完  
聽





